「狼よ落日を切れ」という映画の話は江戸時代から明治時代まで、日本にあった内乱についてであった。新選組や侍が参加した戦争を描写したから、視聴者はたくさん戦闘や爆発が見られて、悪くない映画だと思う。だが、この映画に色々な気になったことがあった。例えば、刀で切ると傷つく時の効果音は無茶苦茶である。事実に映画が映し出したような音は刀で出来ないだと思う。僕があんな効果音を聞いた瞬間、この映画に興味が段々なくなってしまった。もうちょっとリアルな効果音が欲しい。映画が映し出した血糊は面白くて、やりすぎたと思った時がある。例えば、僕はちょっと笑ったが、主人公は刀で敵を二つ割したシーンは面白いが、信じられない。

　それと、主人公やストリーに大事なキャラの力は信じられない。どうやって四面楚歌の状態にいる侍の一人は敵を全員殺せるのか。たしかに、映画だったら事実的の状態だったら、ほとんどの視聴者につまらなさそうな結果になってしまうかもしれないが、僕みたいな事実的なことが大好きな人は違和感がする。

　女性に対する扱いは不公平だが、江戸と明治時代の状態だったら、仕方がない。もちろんれいこなどというキャラの映し出すのはちょっとフェミニストみたいなイメージだと思う。つまり、れいこは強い女性のタイプであった。性役割はたしかにあって、映画の話は江戸と明治時代について、昭和時代に上映した。こんな強い女性のイメージはあって、面白い。

　僕は気に入ったのは薩摩藩の人達だった。またはキャラの色々な話し方や方言。日本語の字幕が付いてなかって、聞き取りはたまに難しかった。だが、映画を見る時、僕は薩摩の人達と主人公と女性の言い方が現代標準日本語と比べていて、何が違うのと考えた。映画に聞いた色々な方言はまだ現代に存在するかどうか知らないが、面白かった。